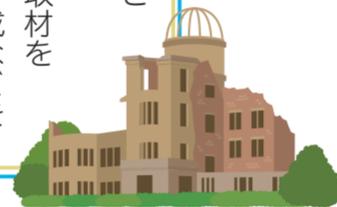




被爆地・広島で平和を学ぶ

— 3年ぶりの広島派遣実施 —

新型コロナウイルス感染症の影響により令和2年度・3年度と中止となった広島派遣事業が3年ぶりに実施された。令和4年度は、親子記者4組を被爆地広島に派遣。現地での取材をもとに、被爆の実相や平和の尊さについて、報告会や壁新聞の作成などを通じて市民に広く周知した。



平和を願う折り鶴の再生を学ぶ

○地域作業所「すまいる☆スタジオ」への訪問と体験学習

恒久平和を願い、世界中から広島に寄せられた折り鶴。この折り鶴を再生紙として甦らせ、未来へつなげる「千羽鶴未来プロジェクト」のメンバーで

核のない世界へ

ある地域作業所「すまいる☆スタジオ」を8月5日、親子記者が訪れ、千羽鶴を再生紙にするための解体・分別作業や再生紙を使った鉛筆作りなどを体験した。

○恒久平和を願い、平和記念式典へ

8月6日、被爆77年の広島原爆の日を迎え、午前8時から、原爆死没者慰霊式・平和祈念式(平和記念式典)が平和記念公園(中区)で行われ、親子記者は式典に参加した。原爆投下時刻の8時15分に、「平和の鐘」の音に合わせて、犠牲者の冥福と世界の平和を祈念して、黙とうを捧げた。式典終了後は、各親子記者が被爆の実相を学ぶと、広島市街を中心に取材した。

「二度(みたび) 許すまじ原爆を」

○被爆電車で被爆の実相を学ぶ

爆心地から約700メートル付近で走行中に被爆し、修復後、現在も生活の足として運行されている広島電鉄650形651号車。8月7日、同車を貸し切り、原爆ドーム前から広島港



を経由して、広島駅までの約1時間を乗車し、車内では、小学校1年生のときに、広島駅付近で被爆した梶矢文昭さん(83歳)の話聞いた。梶矢文昭さんは、被爆者の一人として、「二度(みたび) 許すまじ原爆を」の強い思いを胸に、核兵器の恐ろしさを語り継いでいる。



藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言

昭和57年6月22日

わが国は世界で唯一の核被爆国であり、核兵器廃絶と恒久平和の実現は全国民共通の願いである。

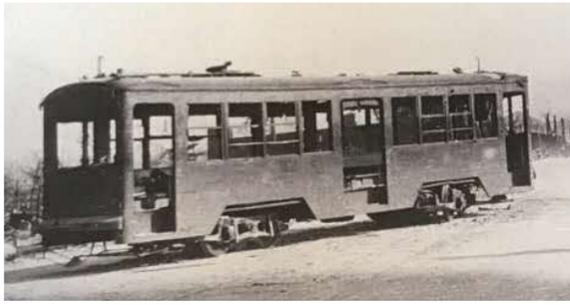
しかし、すでに地球上には多くの核兵器が貯えられ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

藤沢市は、日本国憲法に基づき、国の平和と安全こそが、地方自治の根本的条件であることにかんがみ、非核三原則が完全に実施されることを願い、核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え、この人類共通の大義に向かって不断の努力を続ける核兵器廃絶の平和都市であることを宣言する。

親子記者・広島派遣事業

取材の行程

- 8月5日
 - ・藤沢を出発 広島へ
 - ・「すまいる☆スタジオ」訪問
 - ・平和記念公園見学
- 8月6日
 - ・広島市平和記念式典に参列
 - ・フィールドワーク
- 8月7日
 - ・被爆電車乗車・被爆体験講話
 - ・広島を出発 藤沢へ



原爆で黒焦げになった電車(651号)



現役で運行する被爆電車(651号)

偶然、被爆電車を見つけた。爆心地から700mで被爆し、修理を繰り返して今でも走っている。原爆投下時の悲惨な街を走る電車と復興した今の電車の姿が重なって見えた。翌日の被爆電車の乗車体験で、しっかりと学ぼうと思った。

電車好きの私たちは、原爆で脱線して黒焦げになった電車の写真を見て言葉を失った。電車について調べるうちに今でも被爆電車が走っていることを知り、原爆についてももっと知りたい、復興に関わった被爆電車を実際に見てみたいと思うようになった。

私たちは、又マジ交通ミュージアムを訪れて、「ヒロシマで一番電車が行った」という映画を観た。人手不足で車掌となった15歳の少女が主人公だ。原爆で母と友人を失い悲しみに暮れていたが、わずか3日間で復旧した路面電車に車掌として乗車することになった。広島のリノボルである路面電車が走ることで、被災で傷ついた広島の人々を勇気づけると少女は気づき、笑顔で乗車した。

広島復興を支えた路面電車

被爆電車が人々を勇気づけた

被爆電車から学ぶ

——原爆の恐ろしさとは広島復興——

迫 麟之介 記者
迫 良介 記者



原爆の恐ろしさ

全てを焼き尽くした大火災

私たちは、被爆電車に乗って、梶矢文昭さん(当時6歳、現在83歳)の被爆体験を聴きながら、広島市中心部から広島港の宇品までの被爆地を巡った。

梶矢さんは、爆心地から1.8kmの広島駅西側の分散授業所の玄関で被爆した。その後、倒壊した建物の中から自力で脱出し、広島駅北側の二葉山に逃げた。逃げる途中で、黒こげになって横たわっている人、川で浮いている人、ガラスが刺さって苦しんでいる人、火傷で苦しんでいる人をたくさん見たが、何もできなかったと語ってくれた。



被爆電車での被爆体験講話

私たちは、広島平和記念資料館、本川小学校平和資料館を取材した。当時の写真、絵、手紙、遺品、証言などを通じて、原爆がも

たらした惨状、愛する人を失った人々の悲しみ、被爆者として生きていくための苦悩、復興の苦勞について知ることができた。相生橋で燃える電車の絵は、当時の大火災の凄まじさを語っている。この大火災は、倒壊した家の下で生きていた人々の命を奪った。

戦争を無くすために

お互いを知って、違いを理解しよう

私たちは、千羽鶴未来プロジェクトの平和学習プログラムに参加した。

広島には世界中の子供たちから千羽鶴が送られてくる。千羽鶴未来プロジェクトは、その膨大な千羽鶴の再生を通じて平和を学ぶプログラムを行っている。

私たちは、プログラムに参加して、平和に真剣に向き合って努力している人々に支えられて、今の



平和学習プログラム(千羽鶴の解体作業)



戦争と平和を考える

は、「お互いには、相手を知って、違いを理解しよう」ことから始めなければいけないことを学んだ。

日本の平和があることに気づいた。千羽鶴未来プロジェクトの重松理事長が、「知ること」が戦争を無くすことの第一歩と教えてくれた。

人間は、民族、宗教、身体的特徴などが自分と同じであると安心し、逆に、自分と異なると不安を覚え、時には脅威と感ずる。そして、自分と異なる人を排除や支配をしようとして戦争が起きる。



相生橋で燃える電車の絵(広島平和記念資料館)

許されない原爆

西野 里緒 記者
西野 恵 記者

必死に這い上がった

梶矢さん

〇忘れられない声
「水をくれ」「水をくれ」

私は、被爆電車の中で梶矢文昭さんの被爆体験を聞いた。梶矢さんが、紙芝居のように絵や写真を見せてくれたので、分かりやすく心に響いた。私は、「命を大切にしよう。」と梶矢さんのお話から強く感じた。

八月六日の朝、梶矢さんは分散授業所でお姉さんと一緒に掃除をしていた。お姉さんが外に水をくみに行ったとき、原爆が落ちた。



絵を使ってお話をする梶矢さん

近くにいたお姉さんは即死だった。梶矢さんは建物の下敷きになってしまい、真っ暗な中、動けないまま長い時間がたった。しばらくくずくずまっていたが、光が差し込んで青空が見えた。そこで、死に物狂いで柱を這い上がった。その後、そろそろ歩く人に紛れて山に登ると広島市の町が燃えていた。夕方になって山を下りると、「水をください。」「水をくれ。」という声が出た。梶矢さんは、今でもその声が忘れられないそうだ。

〇生きられなかった人の分も

生きる

私は、梶矢さんが這い上がらなかつたら焼け死んでいたかもしれないと聞いて、本当に危なかったし、梶矢さんが死に物狂いで這い上がったからこそ、今命があるのだと思った。近くにいたお姉さんが助からなかったことも、悲しかった。また、今は水が飲めるのが当たり前なのに、飲めなくてつらかったらと思う。私は命を大切にしたいと強く感じた。

「知る」って

私は、千羽鶴未来プロジェクトの皆さんと折り鶴を再生紙に変える解体作業に参加した。この作業は、折り鶴を開いて色分けする作業だった。

そこで、理事長の重松さんから話を聞いた。折り鶴は平和を願っている、日本中から広島へ送られてきたが、それは倉庫などに保管されていた。ドイツのアウトシュッツで保存されている大量のメガネなどと同じように保存しておくことが重要だと前市長が考えていたからだろう。しかし、市長が変わり、保存して過去の出来事について考えるのではなく、今起きている出来事やこれからの平和を考えていくことが大切だと考え、このプロジェクトが発足したと聞いた。

平和とは何だろうか。それは社会の中で弱い立場の人も安心して生きていくことができることだとプロジェクトの人たちは考えた。集められた折り紙を再生紙として新しいものに生まれ変わる作業に様々な人たちが関わることを通して平和になるということだ。

障害がある人たちのように社会の中で弱い立場にいる人たちのことを私たちがどれだけ知っているだろうか。同じように、世界で戦争や紛争で困っている人たちのことも私たちがよく知らない。知ら

ないからその人たちの命が奪われてもなんとも思わない。でも、もし知っていたらそのままにはしておかないはずだ。ウクライナの戦争はみんな知っているけれど、イエメンの内戦のことは知らない。知っていればイエメンのことを助けたいと思ったはずだ。そのように子どもにもできることはある。例えば、目の前でいじめられている人を知らなければ助けられない。でも、知っていれば助けられることができる。



いるな出来事を知って、平和にならなっていくと思った。

残された 原爆ドーム



「残しておいて、つらくないのかな。」原爆ドームについて、まず思ったことだ。広島に行く前は、原爆が落とされたというつらい出来事は、自分だったら忘れてしまいたいと思うので不思議に感じていた。

原爆ドームを実際に見ると、やはりつらく悲しい気もちになった。しかし、広島に行つて分かったことは、原爆ドームを残そうとしていたのは、大人たちだけではなく、折鶴の会の小中高生が中心になって、保存をするために運動をしていたということだ。見てつらい原爆ドームを残すということを決めたことや、実際に思っていることを実現することは難しいと思う。私は折鶴の会の人たちをすごいと思った。

平和のバトン

つなぐ！平和の輪

細江 一翔
細江 和央

記者 記者



平和への折り鶴が再びみんなの元へ

〜折り鶴再生プロジェクトを経験して〜

すまいる☆スタジオでは、折り鶴の解体作業と再生紙を使った鉛筆作りを体験しました。そこでは障がいのある方が働いています。私たちは作業の方法を教えてもらい、まず折り鶴を一つ一つ丁寧に解体をして色の見本と比べて、似たような色に合わせて、かごに分けていきました。鉛筆作りでは、折り鶴の再生紙を使って紙に絵を書きました。絵が思い浮かばなかったら、自分の名前を書きました。折り鶴を開く作業が最初慣れなくて、上手く開く事が出来ませんでした。鉛筆は上手にできました。藤沢市で折られた千羽鶴が広島に送られていることを初めて知ったり、世界中から送られてきた千羽鶴がこのように再生紙と紙とになって再びみんなの元に返っていくこのプロジェクトがあることを



折り鶴の仕分け作業と鉛筆作り



知り、いろいろなことを知れてよかったです。ありがとうございました。

77年間見守ってくれてありがとう

〜初めて原爆ドームをこの目で見て〜

案内された場所で、初めてその姿を見ました。想像していたよりも建物が大きいと思いました。77年間、あのままずっと残っている原爆ドーム、この間にどれだけの人か。平和記念式典前日にもかかわらず数多くの人たちが、原爆ドームと一緒に写真を撮って、手をあわせていました。僕と同じ小学生や中高生もたくさんいて平和を学

んでいる事が分かりました。初めてその姿を見て感じたことは、平和と人が仲良く暮らすこと、困っている人を助けることが平和の一つなのだと思いました。77年間広島を優しく見守ってくれてくれてありがとうございます。だから僕もこれから、学校で、友だちに優しくしたり困っている子を助

自分たちができること

〜世界が平和になるためには？〜

「社会的弱者が生きられる社会を作っていくことが平和へつながっていく。千羽鶴未来プロジェクトの重松理事長のお話を聞いてすぐく大事なことを考えることができました。その中で、一番印象に残っている話が、



重松先生の話聞いて

「世界から戦争をなくすためにはどうしたらいいか？」という話です。最初、先生からの質問に僕は答えることができませんでした。「難しい質問だよ」と重松先生が言ってくれました。「祈ることは大事だけれど、祈るだけで世界は平和になるだろうか」と問いかけられて、さらに考え込んでしまいました。先生は、「平和になるためには、『まず知ること』『知ろうとする』こと、続けること」と教えてくれました。世界で今、どんなことが起こっているのかを知ること、77年前に

「世界から戦争をなくすためにはどうしたらいいか？」という話です。最初、先生からの質問に僕は答えることができませんでした。「難しい質問だよ」と重松先生が言ってくれました。「祈ることは大事だけれど、祈るだけで世界は平和になるだろうか」と問いかけられて、さらに考え込んでしまいました。先生は、「平和になるためには、『まず知ること』『知ろうとする』こと、続けること」と教えてくれました。世界で今、どんなことが起こっているのかを知ること、77年前に



広島に集められた千羽鶴の説明

広島で何が起ったのかを知ること。この広島で、考えたこと、感じたことを忘れずに、平和な世の中になるよう、これからも勉強していきたいです。



広島平和記念資料館前にて

みたび
三度はいけん!
水が自由に飲めるのは平和だということ

和田 菜々香 記者
和田 綾子 記者



被爆電車651号に乗り、梶矢文昭さんから被爆体験のお話を聞きました。梶矢さんは、絵を見せながら当時の事を詳しく教えてくれました。空襲で危険だった為本来の小学校ではなく、分散授業所に通っていた事、2歳上のお姉さんはお母さんと離れる寂しさから疎開先から自宅に戻った事など、たくさんお話してくださいました。

梶矢さんは、校舎の掃除中に原爆で建物の下敷きになりましたが、がれきをかき分けてはい上がり、はだしで必死に近くの山へ逃げたそうです。まさに「死に物狂いだった」とおっしゃっています。逃げる途中、たくさんの方が「水をくれ」と言っていた声が今でも忘れられないそうです。すべてが破壊されて飲めるような水はなく、多くの方がぐったりして、水を飲めずに亡くなったため、「水を飲みたい時に自由に飲めるという事が、平和という事だ」と教えてくださいました。



被爆電車 651号と梶矢さん

今、世界には約13,000発の核兵器があるそうですが、梶矢さんのお話では、今の核兵器が怖いのは、原爆の威力をコントロールできるようなったことだそうです。77年前より威力が100倍以上の大きいものから、威力を2分の1にしたものまで、たくさん種類があるそうです。梶矢さんは、「次に原爆が落ちたら、人類が死の灰でだめになる。」「三度はいけん!三度は許すまじ!」と何度もおっしゃっていました。

たくさんの方の人生を変えてしまふ、「原爆も戦争も絶対にいやだ!」と、強く思いました。

真っ黒なお弁当

たくさんのお弁当の物語があった

広島平和記念資料館で「真っ黒なお弁当」を見ました。当時中学1年生だった折免滋さんのお弁当箱です。滋さんは建物疎開の作業中に原爆の被害にあいました。当時、空襲で建物が燃え広がるのを防ぐ為に、約8,000人もの中学生が建物を壊す作業に従事し、約6,000人の中学生が原爆で未来をうばわれました。真っ黒なお弁当は、滋さんを探し歩いたお母さんが、滋さんの遺体の下から見つけたお弁当です。資料館で見たとお弁当から、お母さんの愛情の温かさや、大切なものをうばわれた悲しみなど、たくさんの方が伝わってきました。滋さんのお弁



折免滋さんのお弁当

当箱以外にも、たくさんのお弁当箱の物語があったそうです。お父さん、お母さんを想いながらたくさんの中学生在が亡くなり、その家族は子供を探し続けていたそうです。

原爆資料館には、学生服や水筒などたくさんのお品が展示されています。原爆の犠牲になった多くの人の人生、未来がそこにあった証です。戦争、原爆の残酷さを絶対に忘

灯籠に込めた祈り

同じ過ちはくり返さない

元安川の灯籠流しに参加しました。今は、とても穏やかな川ですが、原爆が落ちた直後、川にはすき間なく、たくさんのお骨が浮いていたそうです。爆風で飛ばされた人、大やけどを負い、熱さから



灯籠のメッセージ

逃げるために飛び込んだ人。たくさんの方が苦しみながら亡くなり、今も川底に遺品が眠っているそうです。私は「原子爆弾のこわさをわすれないように」と、鶴の絵やメッセージを灯籠の用紙に書きました。

夕方、平和の灯が川に浮かぶと、77年前も同じ場所に建って、川を見守ってきた原爆ドームが、過ちを絶対に繰り返さないようにと語りかけているようでした。

世界のみんなで考える

だけれどもが

平和に暮らせるように

原爆死者慰霊式、平和祈念式に参列しました。海外の方もたくさん参列していました。岸田首相をはじめ、参列した方が平和への誓いをお話しされました。その中でも印象的だったのは、グテリヌ国連事務総長の「人類は、実弾が込められた銃で遊んでいるのです」という言葉です。核兵器はこわいものなのに、「遊ぶ」という言葉で表現された事がとてもショックで、なんて危ない状況なの!と思いました。そして、「若い世代の皆様へ。被爆者の方々が始められた任務を成し遂げてください。」ともおっしゃりました。

広島、長崎の悲劇を絶対にくり返さないよう、私たちが強い気持ちで訴えて、世界中のみんなで「だけれどもが平和に暮らせる方法」を考えていかなければならないと思いました。



たくさんの方が参列した式典

2022年(令和4年)8月7日

被爆体験講話 on 被爆電車

三度(みたび) 許すまじ原爆を

「核兵器は3度目は許してはいけません。広島と長崎で終わり。3度目の核兵器を使うことがあったら人類が危ない。」そう訴えたのは、小学校1年生のときに被爆した梶矢文昭さん。被爆電車に乗り、流れる風景の中でそのときの様子を聞いた。

戦争中、B29爆撃機が来て爆弾をバラバラ落とす。大変だった。東京も神奈川も静岡もやられておる。ずっと日本の南の方のサイパンとグアムの方にテニアンという島がある。このテニアンという島にアメリカは世界一広い大きな飛行場を作った、そこから日本を次々攻めてきた。昭和20年8月6日、私はお姉さん



講話者 梶矢 文昭さん

昭和14年、広島市生まれ。小学1年生のときに広島駅の近くで被爆。昭和37年から広島市で小学校教諭や校長を務める。平成11年3月に定年退職。嘱託職員を経て、平成13年に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足し、事務局長に就く。令和に入ってから財団法人広島平和文化センターの被爆体験証言者として、「三度許すまじ」の心を伝える活動も行っている。

と連れ立って広島駅近くの分散授業所(臨時の教室)に行った。8時前にお姉さんと一緒に学校に行く、お母さんが見送ってくれたことを覚えている。そして、教室に入って朝の掃除をしていた。これが8時15分限りなく近い時間だな。なんとなく飛行機の音が聞こえた。どっちがバケツの水を替えに行くか言い争った。お姉さんは優しくかった。お姉さんがバケツの水を替えに水道がある台所に入った。私は玄関にいた。これが運命を分けた。片方は死に片方は生き残った。私が生き残った。お掃除をしているときに世界で最初のとんでもないことが起こった。空中から世界で初めての爆弾が落ちてきた。この原子爆弾は地面にあたって爆発するのではなく、空中で爆発した。だから熱線は広がったんです。爆風も広がった。世界で初めてだったので私たちは何が起こったかわからん。お掃除してたとき、突然「ピカーン」、その次に「ドォーン」。だから、原子爆弾というものを私たちはその頃、「ピカドン」と言っていた。原子爆弾というのはだいたい後になつてから言い出した。

雑巾で床を拭いている。突然「ピカーン」「ドォーン」。これは77年前の話です。77年前の昨日、8月6日ですね。私は6歳でした。1年生でした。爆煙は、富士山の3倍くらいの高さまで1万メートルまで立ち昇ったという。あたりは煙で真っ暗になった。だから外にいた人は「ピカーン」の熱線を浴び、その次に「ドォーン」という爆風で吹き飛ばされた。家にいた者は、家の下敷きになった。

私は、家が崩れた真っ暗な中に縮こまっていた。しばらく真っ暗な中で縮こまっていると砂ぼこりがだんだんおさまってきて、上から明かりが見えてきました。必死になって明かりをめぐけて這い上がっていきました。今思うと1年生だったんです。頑張りました。必死になって破れた瓦の穴を目掛けて這い上がって行きました。今でもまだ覚えています。崩れた柱や壁の間を潜って、死に物狂いで崩れた家の下敷きから抜け出しました。抜け出したら目の前をたくさんの方がもう逃げていました。ぞろぞろ長い列を作って逃げていました。私も夢中でその列の中に入って一緒に逃げました。何を履いていたか。何も履く暇なんかありません。ほとんどの人が裸足で逃げていました。私も裸足です。だから足の裏なんかたくさん怪我をしたでしょう。でも死ぬのは怖い。死にたくない思いで、痛いのも忘れて一生懸命逃げました。そして、逃げていく途中で見たものはたくさんありました。ひとつは川でした。川に出るとたくさんの方が死んで流れていました。向こう岸は燃え出しました。私はこちら側の岸を一生懸命逃げた。後で聞いたら、この道も家が焼け出して、私より後の人はこの道逃げることができなかったそうです。私



はぎりぎり逃げることができました。

そして、山の上になんとか逃げました。目の前の広島市の町が燃え出しました。ごうごうと燃え出した。広島市がごうごうと燃えていった。逃げてきた人間にはどうすることもできやせん。ただ燃えていくのを呆然と見よった。朝から燃えて昼も燃えて、夕方になるまで山を下りられなかった。夕方ごろになって少し火がおさまってきて、逃げてきた人々は山を下り始めた。家族のことが心配、近所の人のことが心配、どうなったんだらうか。少し火が収まった頃から、ぞろぞろ下り出した。

私は近所のおばさんにたまたま会った。近所のおばさんと一緒に自分のお父さんやお母さんがどうなったのか心配で山を下りて、広島駅のほうを探した。探して歩いた。人が



いっぱい逃げてきていた。今から思うと火傷もしとる、怪我もしとる、死にかかった人の「水をくれえ」「水をくれえ」という声がすごかった。「水をください」「水をくれえ」今でもその声が耳に残っている。「なんじゃそれ」と思いかもわからん。「水なんかいつでも飲めるじゃないか」それは今は平和だから。原爆の時は水道も破壊され、自分も怪我で動くことができない、でも喉がカラカラ。だから小さい私みたいな子どもでも傍を通ると「水をくれえ」「水をくれえ」と大変な状態だった。今は好きなときに水が飲める。なんともな

いようなことだけれども、それが平和というもの。戦争になったらそうはいかん。

私のお母さんは朝、私たちを見送った後、家に入って窓の近くにいました。「ピカッ」熱線は家が防いだんです。「ドォーン」ガラスが割れて飛び散って、お母さんに50〜60個刺さりました。でも、私のお母さんだけではない。たくさんの方がガラスの被害を受けています。私のお母さんは運が悪く、片方の目にガラスが刺さりました。原爆で片方の目は見えなくなりましたが、生きて私たちを育ててくれました。

原爆が落ちた77年前の8月6日の夕方、やっとお母さんを探した。やっとお母さんを見つけた。お母さんは傷だらけだった。50〜60個ガラスが刺さっていた。病院も原爆でやられている。ガラスを抜いて、側にあった布でぐるぐる巻いただけだった。一つのガラスは目ん玉にも刺さっていた。だから私のお母さんは片方の目が見えないまま原爆後生き抜いた。「死んでたまるか、死んでたまるか」お母さんは94歳まで生

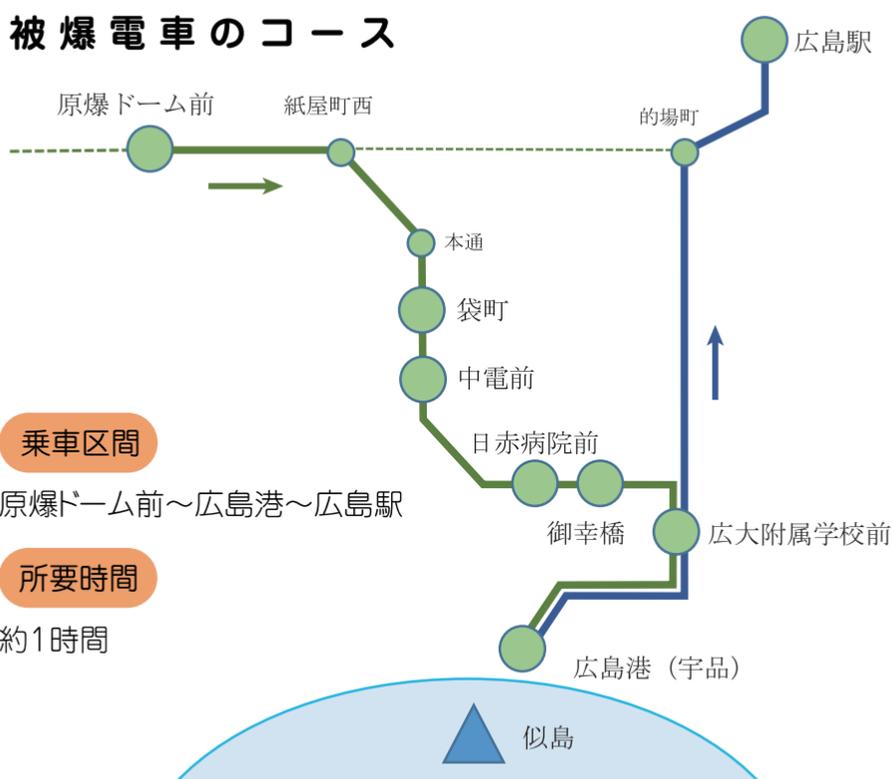
きた。94歳まで生き続けてくれた。私たちも幼かった。食べるものもなく苦勞して、苦勞して育ててくれた。

私の姉さんは田舎に疎開していた。そこへお母さんが着替えを持って行った。お母さんの顔を見ると「連れて帰って。連れて帰って。連れて帰って。」と傍を離れなかった。お母さんは「広島は危ない。いつ爆弾が落ちてくるかわからん。田舎は安全だからおりなさい。」何度も何度も言ったそうです。次の日、お母さんだけがバスに乗って帰りかけると、お姉さんがそのバスを必死で追いかけてきたそうです。その頃のバスは今みたいにガソリンじゃない。戦争の終わり頃日本にはガソリンはなかった。だから炭を焚いて走っていた。スピードが出なかったんでしょね。わずかに坂道になっていたので、バスもスピードが出なかった。そのバスを私のお母さんは追いかけて来たそうです。お母さんの乗ったバスを追いかけて来ている。「連れて帰って。連れて帰って。」と。それを見たお母さんがついに「バスを停めてください。」と運転手さんに言った。運転手さんも追いかけてきている子がわかつたんでしょ。すぐに停めてくれたそうです。そして、お母さんのところに駆けつけたお姉さんは、お母さんに抱きついて「連れて帰って。一緒に連れて帰って。死んでもええ。死んでもええから、お母さんと一緒にええ。」ワーッと泣き出したそう

です。それで、お母さんはついに「わかった。広島に帰ろう。死ぬときは一緒に死のう。」そう言って広島に連れて帰った。そして4日後に「ピカッ」「ドォーン」お姉さんは原爆で亡くなった。だから、私はお姉さんの死んだときの顔を見とるんですが、お姉さんの顔は少し笑っているようだった。微笑んでいた。お姉さんはまだ3年生。9つだったが一生懸命生きた。必死になって生きた。「お母さんと一緒にいたい。」その思いは達した。お母さんと一緒におれた、しかし原爆にあって死んだ。死

んだときに少し微笑んでいるような顔で死んでおった。その顔を見たときに不思議でたまらんかったが、今から思うとお母さんはお姉さんなりにあの戦争の中で、一生懸命生きたんだなと思っている。こんな話は私のお姉さんだけではない。広島市内にはいっぱいあります。たくさんの方がたくさんのお母さんが原爆で亡くなった。広島市内には原爆で同じような悲しみがいっぱいあるということを最後にお話しして終わりにします。ありがとうございました。

被爆電車のコース



編

集

後

記

平和の尊さを
語り継いでいきたい

迫 麟之介・良介 記者



被爆電車がきっかけで広島取材した。原爆の悲劇は想像以上で、復興は、生き残った人々の悲しみと苦勞と希望の上に成り立っていた。原爆投下から77年が経ち、被爆者の平均年齢は84歳である。私たちは、今回の取材を通じて学んだ戦争の悲惨さと平和の尊さについて、親から子、子から孫、そして友人へ語り継いでいきたい。

忘れたい記憶を
未来の平和への
まなざしに変えて

西野 里緒・恵 記者



つらい体験を忘れてしまいたいと思うことは、素直な感情だ。「平和の灯が消えるのは核兵器がなくなったとき」という話を聞いた。それが実現するまでは決して忘れることはできないのだ。さらに、千羽鶴未来プロジェクトの人たちはこれからの平和もみつめていた。今回共有できたそのまなざしを私たちが大事に育てていきたい。

学び伝え、そして
未来へとつなぐ

細江 一翔・和央 記者



77年前の広島は空もこんな風に晴れていたのかと感じながら、一瞬で多くの人の命が奪われた8月6日に広島にいられたことが貴重な経験となりました。たくさんの方が勉強することも大切ですが、何よりもその地で話を聞いたこと、その地を見たりすることが本当の意味で大切なのだと感じました。この経験を、今日で終わらせたいようにしたいと思います。

「平和」への思いを
つないでいきたい

和田 菜々香・綾子 記者



「日本は、絶対に戦争をしない国」だと思っていましたが、周りの国で戦争が起こると「大丈夫かな…」と心配になりました。今回広島で、原爆の残酷な写真を見て、悲しい体験を聞き「核兵器も戦争も絶対にだめだ。」と真剣に思いました。自分が広島で感じた事を友達に伝え、「平和」を願う気持ちをつないでいきたいと思えます。

